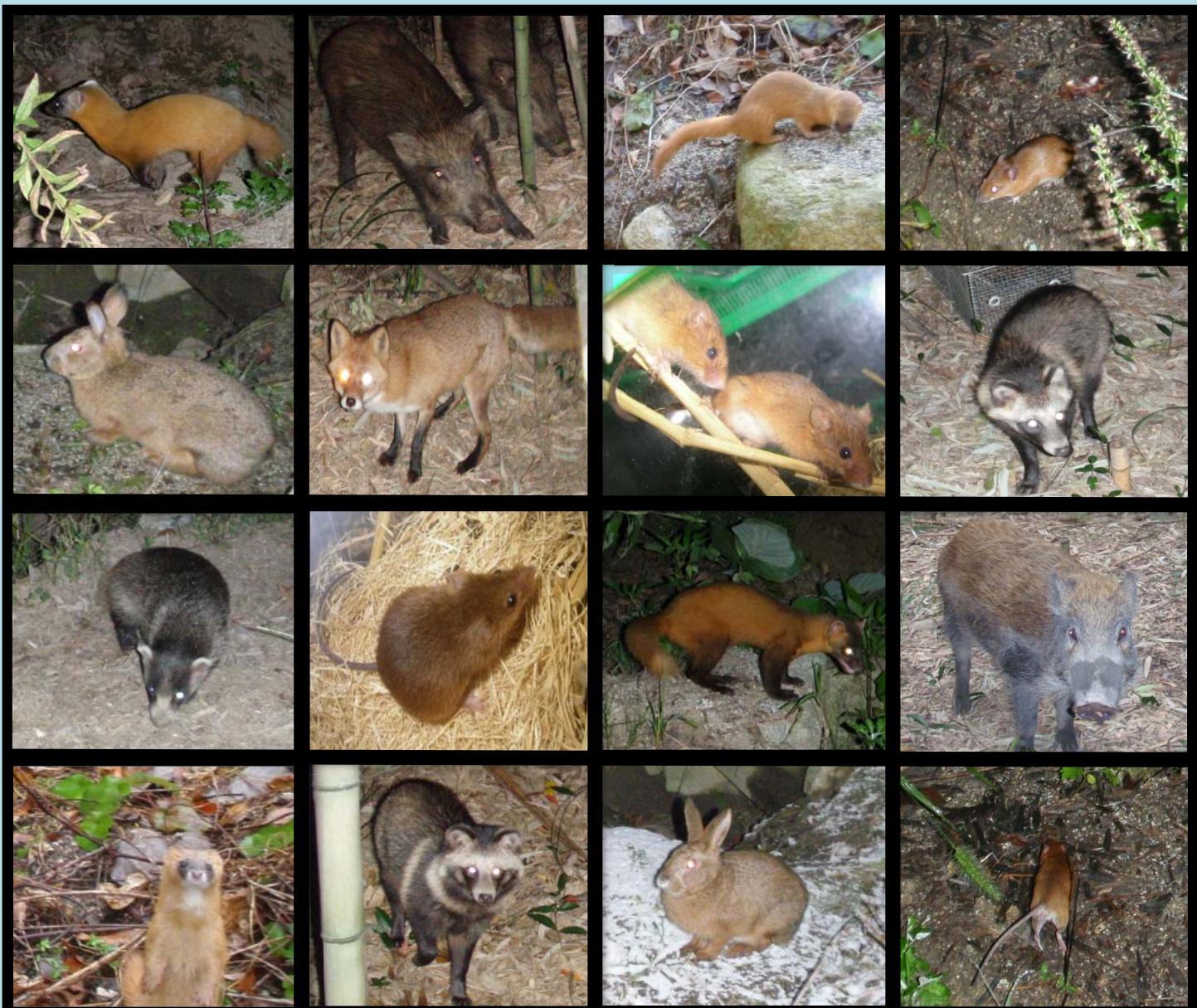


伊都キャンパス 動物図鑑



目次

	ページ
■ 図鑑紹介	2~3
■ アカネズミ	4~5
■ キュウシュウノウサギ	6~7
■ ニホンアナグマ	8~9
■ イタチ	10~11
■ ホンドテン	12~13
■ ホンドタヌキ	14~15
■ キツネ（アカギツネ）	16~17
■ ニホンイノシシ	18~19
■ カヤネズミ	20~21
■ 編集後記	22

伊都キャンパス 動物図鑑

動物学研究室は、一年を通して伊都キャンパスに棲息している哺乳類動物のモニタリング調査を行っている。この伊都キャンパス動物図鑑では、伊都キャンパス内の生物多様性保存ゾーン（エコトンネルを含む）とそれに隣接する森林群落保全ゾーン（西部エリア）において、自動カメラによって撮影された野生哺乳動物たちを紹介する。



調査方法

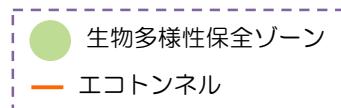
・センサーダブルによる調査

熱の動きを感知する赤外線センサー付きの装置にデジタルカメラを設置し、近くに寄ってきた動物を自動的に撮影している。また、動物をおびき寄せるために、香りの強い果物を入れた金網ケージを設置している地点もある。



エコトンネルとは？

伊都キャンパス内にある生物多様性保全ゾーンは、学内の幹線道路によって周辺緑地へと繋がる森林群落保全ゾーンと分断されている。そのため、小型・中型動物が自由に行き来できる通路として、エコトンネルが設置されている。実際に動物たちがエコトンネルを利用してこのゾーンを行き来しているようである。また、トンネルの入り口付近を散策する動物たちの様子も撮影されている。



アカネズミ

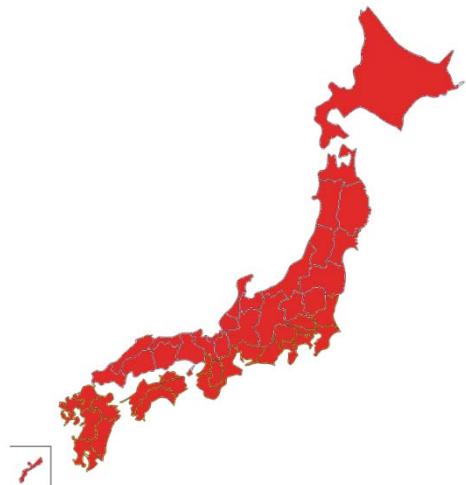
学名 : *Apodemus speciosus*

齧歯目ネズミ科 アカネズミ属



分布

日本固有種で北海道、本州、四国、九州、および周辺の島々に分布している。分布域の南限は屋久島で、生息地によっていくつかの亜種に分けられており、とくに離島にすむものはそれぞれが別亜種として扱われている。日本のネズミ類では最も優勢で、里山の代表的ネズミであり、猛禽類や小型・中型肉食獣の餌となる。黒部川と天竜川を境界として、それより東には $2n=48$ の個体群、西には $2n=46$ の個体群が棲息すると報告されている。



形態

体色は口吻から尾の先端まで背側は橙褐色、腹側は白である。よくみると、その体毛の色は美しく、とてもかわいいネズミである。頭胴長は 80~140mm、尾長は 70~120mm、体重は 30~50g である。近縁のヒメネズミに似ているが、(1) アカネズミの方が体が大きく目も大きい、(2) 尾長／頭胴長の比率がヒメネズミに比べて相対的に小さい(尾が相対的に短い)、(3) 後足長がヒメネズミより長いことなどから識別できる。また、ミトコンドリア DNA 遺伝子を調べ系統樹を作成することにより、2種を明確に区別できる。



生態

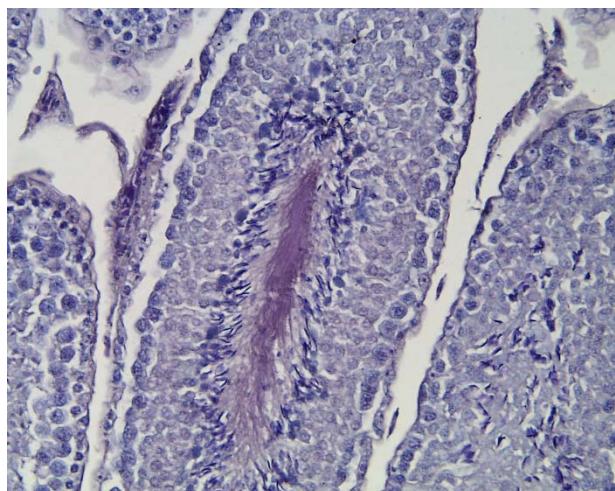
・繁殖

アカネズミは、年に1～2回、地下に掘った巣穴の中で1～8仔を出産し、メスが仔の面倒をみる。下左図はトラップ内でイノシシに踏みつぶされた雌個体の重複子宮を示している。7個体の胎児が子宮にみられた。

1993～1994年に捕獲された糸島半島に棲息する雄アカネズミの精巣の大きさ（長軸）を調べたところ、8月～3月にかけて雄の精巣が肥大していることが分かった。また、秋に採取したアカネズミの精巣では、精子產生も活発であった（下右図）。これからから、糸島半島のアカネズミは、秋一山型の繁殖期を持っていると思われる。



＜アカネズミの子宮＞



＜アカネズミの精巣＞



・食性

主に植物の種子や柔らかい根茎を食べるが、昆虫を捕食することもある。クヌギ、ナラ、カシなどの堅果（ドングリ）が好物で、その年々の餌の量によって個体数が変化することが知られている。ドングリを運搬し、土の中に埋めて貯蔵することで、ナラ、カシ類の再生にも貢献している。ドングリに含まれる毒性のあるタンニンは、アカネズミが持つタンニン結合性唾液タンパク質とタンナーゼ産生細菌によって無毒化される。



・習性

森林、里山の低地から高地まで広く分布し、水田の畦や畑にも出現する。アカネズミは夜行性で地中に巣穴を掘り、地表を中心活動する。一方、近縁のヒメネズミは樹上を好んで行動する。アカネズミは後足の筋肉が発達していて、長距離を移動することができる。

＜ネコに補食された
アカネズミ＞

キュウシュウノウサギ

学名 : ***Lepus brachyurus brachyurus***

ウサギ目ウサギ科ノウサギ属



分類

日本のノウサギ属には、*L. b. angustidens*（トウホクノウサギ）、*L. b. lyoni*（サドノウサギ）、*L. b. okiensis*（オキノウサギ）、*L. b. brachyurus*（キュウシュウノウサギ）の亜種が存在する。



分布

キュウシュウノウサギは本州の東北以南の太平洋側、四国、九州に生息する。また、トウホクノウサギは本州の東北地方、日本海側、サドノウサギは佐渡島、オキノウサギは隠岐諸島に生息する。

形態

体長は約45cm、体重2.5Kg、尾長は約3cmである。積雪する地域のノウサギでは、秋頃より体毛の色が抜け落ち、冬には耳の先端の黒い体毛部分を除き体毛は白色なるが、キュウシユウノウサギは冬期になっても体毛は変化せず、年中茶褐色の毛色をしている。



生態

・食性

植食でおもに木の芽や葉、草などを食べるが、冬には木の枝や皮も食べる。

・繁殖

交尾期はふつう1月中旬に始まり、出産は早春から秋まで連続して行われ、妊娠期間は42~47日、1回によよそ2頭を産する。ノウサギは生まれた時、既に体毛が生え、眼も開いている。1ヶ月ほどで独立し、8~10ヶ月で性成熟し、繁殖できるようになる。



・習性

ノウサギは単独で生活する。また、巣らしいものは作らず、草の生えたくぼみなどを寝ぐらとし、昼間は茂みの中や岩かけで隠れて過ごし、夜になると行動する。ワシ、タカ、フクロウ、キツネ、イタチ、テンなどが天敵としてあげられる。ノウサギの寿命は4年未満である。

【アマミノクロウサギについて】

アマミノクロウサギは、ウサギ目ウサギ科アマミノクロウサギ属の一属一種で、奄美諸島の奄美大島と徳之島のみに生息する。湿潤亜熱帯の森林に適応した生活を送るウサギで、ウサギ科では最も原始的な種とされており、特別天然記念物に指定されている。

頭胴長40~50cm程度で、尾は短く長さ1~2cm。体重は2kg前後。耳が短く(4~5cm)後肢も短い(9cm)ので、他のウサギと比較して跳躍能力に劣る。体色は全体として茶色または黒茶色である。通常1頭で生活しており、昼間は巣穴に隠れており、夜になると巣を出て、植物の新芽、草、若木の樹皮などを食べる。巣穴を掘るのに適した長くて強大な爪を持っている。一般に1産1仔で、春と秋年2回の出産期があるといわれている。野犬や野生化したイエネコ、外来種マンガースなどにより、アマミノクロウサギが捕食される事態が起きており、生息数の減少が心配されている。



アマミノクロウサギ

ニホンアナグマ

学名：***Meles meles anakuma***

ネコ目イタチ科アナグマ属



分布

本州、四国、九州の里山や森林に棲み、特に谷に面した斜面を好んで生息する。埼玉、千葉、東京では特に個体数が少ないが、山形、福井、奈良、島根、佐賀では比較的個体数が多い。また、福岡県のレッドデータブックには準絶滅危惧種として記載されている。



形態

全体的にくすんだ褐色をしていて、ずんぐりむっくりした体形である。両眼部、胸および手足は黒っぽい褐色をしており、吻部から頭部にかけての正中線部と耳の内側は白い。指は5本で、親指のみ他の4本の指と離れており、穴掘に適した鋭い爪を持つ。体長は40~50cmで尾は短く6~12cmほどである。体重は4~12kgと個体差が大きい。

生態

・繁殖

交尾期は3～4月である。遅延着床が起こるため出産は翌年の3～4月と約1年の妊娠期間がある。産仔数は1～3頭で、授乳期間は3ヶ月程度である。夏には、子どもが巣穴の外に出るようになり秋ごろには巣立ちを行う。母親は仔の世話を1～2年間した後に、1匹のメスを手元に残し翌年生まれた子どもを育てる手伝いをさせることもある。



・食性

雑食性で、カエル、ネズミ、鳥、果実、木の実、昆虫など様々なものを食べる。土を掘り返してミミズを食べることがあり、その際ミミズとともに農作物を掘り起こす等の被害も報告されている。

・習性

夜行性であり、日中は巣穴の中で休息する。大きな鋭い爪を持ち穴掘りが得意で、巣穴をずんずん掘り進んでいく。巣穴は地下で複雑に繋がっており、複数の出入り口がある。出入り口は草むらや倒木によって隠されている。秋から初冬にかけて採食量が増加し、皮下脂肪を増し冬眠に備える。しかし冬の平均気温が10°Cを越える関西以南の地域では冬眠しない個体が多い。冬眠は主に11月下旬から4月中旬まで行われ、1日の平均気温が10°Cを超えると自覚め活動し始める。タヌキのように大規模ではないが、ため糞をする習性がある。また、アナグマは死んだ振り(擬死、狸寝入り)を行う。一度狸寝入りを行うと薄目を開け動かなくなる。狸寝入りは捕食者に捕まる、猟銃の音に驚くなどの刺激によって反射的に引き起こされる。



妊娠していると思われる個体



脂肪を蓄え太った個体（12月撮影）

【個体数の減少】

アナグマは、ムジナ、ササグマなど様々な俗称が存在し、人と関わりの深い動物であった。しかし、近年各県で準絶滅危惧種として認定されるなど個体数の減少が問題となっている。これは、個々のアナグマの生息域がかなり広い事に起因している。そのため、住宅建設などを理由とした大規模開発により行動圏を奪われてしまう。アナグマは土地の開発によるダメージを大きく受けてしまう種である。

ニホンイタチ

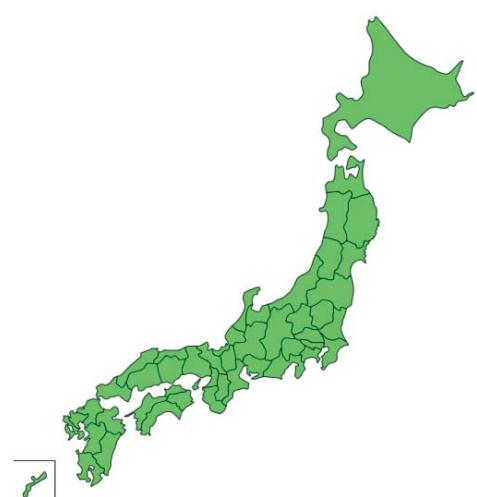
学名:***Mustela itatsi***

食肉目イタチ科イタチ属



分布

北海道・本州・四国・九州・南西諸島などに生息する。北海道・南西諸島などでみられる個体は国内移入種である。西日本に生息するニホンイタチはチョウセンイタチに圧迫され、生息域を山間部に限られつつある一方で、移入先の三宅島などでは、ニホンイタチが他種の在来動物を圧迫している。チョウセンイタチは本州西部・四国・九州・対馬に生息する。



形態

イタチの体長は雌雄でその大きさが顕著に異なり、雄が雌よりひと回り以上大きい。♂頭胴長 30~37 cm、尾長 12~16 cm、体重 290~650 g。♀頭胴長 20~27 cm、尾長 8~9 cm、体重 110~180 g。国内産の哺乳動物の中では雌雄差が最も大きい。

下図はハツカネズミ等との大きさを比較したものである。



ハツカネズミ

アカネズミ

ドブネズミ

ニホンイタチ♂

生態

・繁殖

年1回、3~5月に交尾し、ほぼ1ヶ月後に平均5頭出産する。仔育ては雌親のみが行い、自分の行動圏内の巣で仔を育てる。仔は生後約5週目で視力を得て、授乳期は生後8~10週まで続き、10週目頃から幼獣自身で餌を捕獲するようになり、秋に親離れする。翌年には繁殖できる個体となる。

・食性

主に動物食でネズミ、小鳥の卵や雛、カエル、昆虫類、ミミズなどを捕食し、水に入りザリガニなどの甲殻類や魚類を捕食することもある。また、ヤマグワ、サクラ、ヤマブドウ、マタタビ、サルナシの実などの植物質のものも食べる。

・習性

主に夜行性で、一年を通して活動する。個体間のコミュニケーションには糞や尿を用いることが多い。手足の指の間にはみずかきがあり、泳ぎが得意である。主に、平野部の草地や、川沿いなどの水辺に生息する。雌は一定の行動圏をもち、土穴などを巣としているが、雄はいくつかの雌の行動圏に重なるような行動圏をもつ。

エコトンネルの周りを動き回っているイタチ



ホンドテン

学名 : ***Martes melampus***

食肉目イタチ科テン属



分布

食肉目イタチ科テン属のほ乳類の総称をテンという。アメリカテンやムナジロテン、北海道やサハリン、シベリアなどに生息するクロテンなど、似たような種類のものはたくさんいるが、日本国内では主に本州、四国、九州などの山地や平野部の森林にホンドテンが生息する。

形態

夏季は毛衣が赤褐色で、顔や四肢の毛衣は黒、喉から胸部が橙色、尾の先端が白い。ホンドテンの中でも一年中色が変わらない個体はステン、冬毛になると毛衣が黄色か黄褐色で、頭部が白に変わる個体はキテンと呼ばれている。体は細長く、体長はオスが約45~49cm、メスが約42cmである。体重は約0.9~1.5kgと幅広く、尾はオスが約17~32cm、メスが約20cmである。



生態

繁殖

繁殖期は春から夏にかけてと幅広いが、ほとんどは夏季に交尾を行い、出産は翌年の4~5月となる。一度の出産で2~4匹の仔を産む。

食性

雑食性で餌はウサギやネズミ、リス、果実などを食べる。秋には野ブドウやアケビも好んで食べる。ただ、最近は森の中でえさを探すことが難しくなっていることもあって、人里に姿をあらわすこともよくある。



習性

夜行性のため、日中は樹洞などで静かにしていて、夜になると活動し始める。木登りが上手なので、イタチ科の動物の中では一番樹上生活に適しているといわれる。また、テンは基本的に単独行動をする。左写真は岩場をよじ登っているテンを示している。



イタチとテン

イタチとテンは形態が似ているが、イタチはテンより小さくほっそりしており、またテンは手足と吻が黒いことから容易に識別できる。

(右写真 上：テン 下：イタチ)

【伝承】

テンはキツネやタヌキを上回る変化能力を持つという言い伝えや、テンを殺すと火難に遭うとして恐れられていた。また、ある地方では、イタチが数百歳を経て魔力を持つ妖怪となつたものがテンとされていた。



ホンドタヌキ

学名 : ***Nyctereutes procyonoides***

食肉目イヌ科タヌキ属



分布

西南諸島と対馬を除く日本、朝鮮半島、ロシアの沿海州、中国に分布する。日本では、ホンドタヌキと北海道のエゾタヌキの二亜種が生息する。



〈ホンドタヌキの生息域〉



形態

体重 3~6kg、季節差が大きく晩秋に最大となる。尾長 18cm 程度を含む全長 70~80cm、後肢長 10~11cm、耳長 4~5cm。性的二型はほとんど見られない。耳はやや丸く、目の回りに黒いマスクがあり、肩や足も黒い。毛色は薄いグレーから褐色または濃い灰色まで、バリエーションがある。歯は基本的にイヌと同じである。足の指は 5 本だが、地面に付くのは 4 本である。



生態

平地から低山の川や沼の近くの森林で生活する。昼間は巣穴で眠り、夜に行動する。50 ヘクタール程度の行動域をもつが、複数の個体の行動域が重複しているため、特に厳密な縄張りというものは持っていないようである。野生のタヌキの寿命は 6~8 年ぐらいであるといわれており、飼育下のものでは最大 14 年も生きた個体が知られている。

・繁殖

タヌキは毎年 1~3 月頃に繁殖期を迎える。オスとメスが一夫一妻となり、2 匹一緒に行動するようになる。妊娠期間は約 2か月で、3~5 月頃に出産する。一度の出産で生まれるタヌキの仔どもの数は 1~8 匹（一般的に 5~7 匹の場合が多い）で、産まれたばかりのタヌキの仔どもは目が開いておらず、真っ黒な毛皮に覆われてあり、体重は約 60~90 g である。

・食性

ネズミ類、カエル、鳥類や卵、魚類、昆虫類等の小動物のほか、果実などの植物質のものも食べ、雑食傾向が高い。

・習性

タヌキは複数の個体が特定の同じ場所に排糞をする習性があり、これは俗に「タヌキのため糞」と呼ばれる。冬眠の習性はないが、秋になると冬に備えて脂肪を蓄え、体重を 50% ほども増加させる。積雪の多い寒冷地では、冬期に穴ごもりすることが多い。



キツネ（アカギツネ）

学名：**Vulpes vulpes**

食肉目イヌ科キツネ属

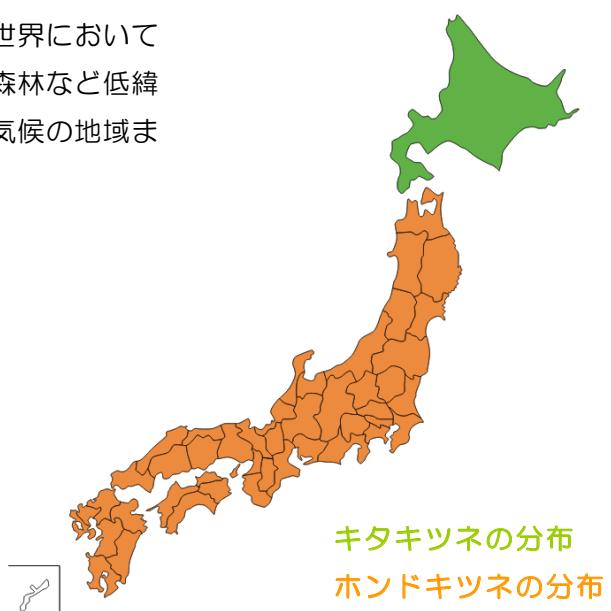


分布

キツネ（アカギツネ）は、北海道に生息する「キタキツネ」と本州・四国・九州に生息する「ホンドギツネ」に分けられる。世界においては北半球のほぼ全域に生息しており、大草原や低木地、森林など低緯度地域に適しているといわれているが、砂漠やツンドラ気候の地域まで生息しているものもいる。

形態

体長約50～80cm、尾の長さは約30～50cmで、体の大きさに対して尻尾が長いのが特徴。体のように目の色も黄色がかっている、ネコ科の動物のように縦に裂けた瞳を持っている。そんな形態から「猫のようなイヌ科」と呼ばれることがある。聴覚、嗅覚、視覚に優れ、跳躍力は2mもあり、走る最高時速は50kmと速い。また警戒心の強い動物である。



生態

・ 繁殖

群れを作ることはなく、仔育ての時以外は主に単独で行動する。巣穴を掘り、居住、出産、仔育てに使用する。一夫一妻制と言われていたが、近年例外も確認されていて、場合により複婚もある。メスは一度に3~8匹の仔を生む。仔は生後5週間で巣穴の外に出るようになり、10週間で乳離れする。

・ 食性

キツネはねずみなどのげっ歯類、昆虫類、果実、ミミズ、卵、鳥類などを、1日に0.5kg~1kgほど食べる。都市圏においては家庭ごみも食べる。

・ 習性

キツネの狩りの方法として「チャーミング」というものがある。小動物はキツネを見つけるとすぐやく穴に逃げこむ。キツネはそれを知っているので、草などを食べている獲物を見つけると獲物が逃げないほどに距離をおき、苦しそうに転がり始め、自分の尻尾を追いかけてぐるぐると回ります。そうすると獲物はその演技に見入ってしまう。キツネは休み無く回り続けるが、実はこの間にも注意を怠らず獲物を捕らえられるほどに距離を縮めて、ぱっと捕まえてしまう。

【エキノコックス】

エキノコックスとは、キツネ（主にキタキツネ）に寄生する寄生虫の一種である。人にも感染し、人の場合はキツネの排泄物などから、口を通して侵入し、肝臓などの器官に寄生する。自覚症状が出るまで数年~十数年にも及び、放っておくと握りこぶし大の大きさに成長、肝臓障害などを起こして最後は死に至る症状を起こす。毎年約20人がエキノコックスに感染しているが、保健衛生指導などによって予防できる。他に生水を飲まない、発生地の沢水や井戸水は加熱してから使用する、人家にキツネを近づけないなどの予防法がある。熱には弱く、60度10分間加熱で死滅する。症状が出てからの治療は困難な為、スクリーニング検査が重要であり、北海道では広く行われている。九州での発症例は殆ど無い。



エコトンネルの前を横切っているキツネ



北海道のキタキツネ

ニホンイノシシ

学名：**Sus scrofa leucomystax**

鯨偶蹄目イノシシ科イノシシ属

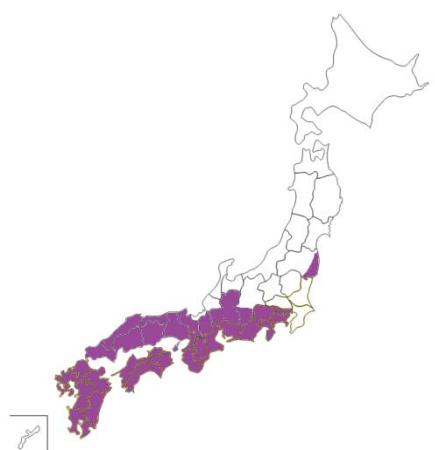


分布

北アフリカの一部からユーラシアに広く分布する。日本産亜種ニホンイノシシ *S. s. leucomystax* は本州、四国、九州、淡路島に分布する。沖縄等南方にはリュウキュウイノシシが棲息する。雪の多い東北、北海道には棲息していない。

形態

頭胴長 110~160 cm, 尾長 23 cm, 体重 50~150 kg。性的二型が認められ、雌の体のサイズは雄より 20~40 % 小さい。犬歯は終世成長し、雄では牙となる。指は前後とも 4 本で、2 個の蹄をもつ。しばしば家畜ブタとの交配が起きてくると考えられる。



生態

・繁殖

秋から冬にかけてメスは発情し、翌年の春から夏に出産する年一産で、一回に 4~6 頭の仔を産む。妊娠期間 15~120 日。生後 1 年を超えるとオスは親元を離れて単独生活をするといわれているが、メスはそのまま親

元で育ち母系的な群れをつくり、生後18ヶ月で性成熟する。生後2ヶ月以内の幼獣には特徴的な縞模様がありウリ坊と呼ばれる。幼獣期にはキツネが天敵となる。寿命は10年以内。



・食性

雑食性で、土を掘り起こして、各種の植物（根茎、果実、堅果）・農作物、動物（昆虫類、ミミズ、タニシ、カエル、ヘビ等）を菜食する。水稻をはじめ多くの農作物に多大の被害を与える。吻部の力は強く、40Kg ほどの岩や倒木を動かすことができる。餌をもとめて、一日に数キロ移動する。

・習性

森林、水田、農耕地、平野部にかけて広く分布する。一般にイノシシは猪突猛進のイメージがあるが、本来はおとなしく臆病で、警戒心が強く、かつ一方で大胆といったさまざまな側面をもつ。ただし、手負い個体や子連れ個体あるいは発情期の個体は危険である。高い跳躍能力を持ち、助走なしで 1m 以上の高さを飛び越えることができる。吻部で物を動かしたり掘り起こしたりする力も強く、また体表の剛毛のため、電気柵の電気ショックも効果が低い。嗅覚は非常にすぐれており、あまり視力は良くないとされるが、100m 以上離れていても敵を察知できる。さらに困った事に、学習能力、記憶力がすぐれ、かなり賢い動物である。

【イノシシの被害防除】

イノシシの被害を減らすには、イノシシの好まない環境作りが大切である。

- (1) 収穫されない果物やクズ野菜などの放置は餌付けに等しく、イノシシを誘因することになるので除去する。
- (2) イノシシは臆病なので、身を隠す場所を求める。農地周辺の草刈りなどを行い、できるだけ見通しの良い場所に変える。
- (3) 農地に近接するけもの道に障害物を置いたり、草を刈るなどして、けもの道を断つ。
- (4) 農地の効果的な囲い方には様々な方法がある。トタン板、有刺鉄線、ネット、電気柵などが一般に用いられる。防除柵を効果的にするには保守管理が大切で、支柱のぐらつき、柵の隙間、下草、などの日頃のチェックが大切である。
- (5) イノシシは繁殖力が強く、放置するとネズミ算的に個体数が増え、生態系を破壊するとともに、農作物に多大な被害を与える。個体数の管理（捕獲）は大切であり、わなや狩猟で数を減らす事が、農耕地の被害を低減させるために必要である。



カヤネズミ

学名 : ***Micromys minutus***

齧歯目ネズミ科カヤネズミ属



分布

ヨーロッパからアジアに広く分布しており、日本では本州の東北以南地方、四国、九州に分布し、北海道、青森県、秋田県、岩手県、南西諸島では発見例がない。

形態

雌雄とも頭胴長 54~79mm、尾長 47~91mm、体重 5~14g の世界で一番小さなネズミで、学名のミクロミス・ミニトスは「小さいネズミ」という意味である。顔は丸く吻は短く、耳介は小さくて大部分が毛衣に埋まる。尾は長くて先端は裸出し、この尾の先端を草や茎に巻き付けることで、巧みに草を登ることができる。成体は背面が橙黄色、腰部が純白で、幼体は背面が暗褐色、腹面が灰白色である。



生態

- ・繁殖

九州など南部の地域では春から初夏および秋から初冬にかけての2回の繁殖期があるが、関東以北での繁殖期は夏のみである。妊娠期間は17~21日で、1回の産仔数は2~8頭、平均5~6頭である。カヤネズミの寿命は1~2年程度である。

- ・食性

イネ科植物の種子や草の実のほか、バッタやイナゴなどの昆虫も食べる。

- ・習性

畑や水田、休耕地、河川敷など水辺のイネ科植物の密生した草地に棲む。出産・育児は、生息地内に繁殖用の巣を作つて行なう。この巣は、地表約1mの高さのイネ科植物の茎などに、葉や穂綿を利用してつくられた直径8~10cmほどの球形のもので、生きた葉を利用して巣を作ることで、周りの植物と同じ色となって同化することができる。この球巣において出産・育児を行なうほか、日常の生活も行なう。草が枯れる冬期は、地中に穴を掘つて過ごす。また、水面を泳ぐこともできる。



カヤネズミの球巣



【希少性】

カヤネズミは、イネ科植物の密生した草地の減少により、非常にその数を減らし、地域によっては絶滅寸前にまで追い込まれている。福岡県レッドデータブックでは絶滅危惧種にあげられている。また、本種は、水辺の生物の豊かさを示す「環境指標生物」に指定されており、環境省のプロジェクトであるモニタリングサイト1000にもその調査指定を受けている哺乳類である。





編集後記

九州大学は平成17年から伊都キャンパスへの移転を開始し、平成31年までには移転を完了する予定です。新キャンパスの一つのコンセプトは自然との共生です。動植物の生態系をできるだけ保存しながら、移転を完了することを目指しています。そのために、動物、植物、昆虫、魚類、鳥類などの生物の生態調査を行うとともに、移転にともなう環境変化のモニタリングが行われています。本図鑑は動物学分野が担当している野生の哺乳類について、平成19年から平成22年までの調査データをもとに、伊都キャンパスに棲息する哺乳動物を分かりやすく解説したものです。この図鑑に掲載した動物は実際に写真撮影されたものですが、その他にもモグラやジネズミなど写真撮影できなかった動物も棲息しています。伊都キャンパスに学ぶ学生・教員の皆様に、どのような動物が伊都キャンパスに棲息しているのかを知っていただきたく、この図鑑を作成しました。

伊都キャンパスの哺乳類生態調査は、動物学分野に所属する多くの学生さんたちの協力を得て行いました。また、本調査および図鑑の出版にあたっては、キャンパス移転調査学術研究都市づくり関連調査等経費のご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成23年12月

九州大学大学院農学研究院 資源生物科学部門 動物学分野
教授 飯田 弘

(無断複製・複写を禁ず)



九州大学大学院農学研究院
資源生物科学部門 動物学分野